

注目のキーワード「夏枯れ相場」

8月のニュースや経済記事などで「夏枯れ相場」という言葉を目にしたことはないでしょうか。これは、夏休みやお盆休みなどで市場参加者が少なくなり、株式や為替などの取引量が減少した状態を指す言葉です。植物が暑さで勢いを失うように、市場の取引も活気を欠いている様子を表して、このように呼ばれています。

市場では、多くの投資家が売買に参加していると、企業業績や経済指標などを材料に価格が動きやすくなります。ところが、夏場は国内外の投資家が休暇に入りやすく、積極的な売買が手控えられることがあります。その結果、株価や為替に明確な方向感が出にくくなり、日々の値動きも小幅にとどまりやすくなります。こうした、商いが少なく静かな相場環境が、一般的に「夏枯れ相場」と呼ばれます。

もっとも、夏枯れ相場だからといって、必ずしも相場が静かに推移するとは限りません。むしろ、売買が少ない時期に重要な材料が出ると、普段よりも市場が反応しやすくなる場合があります。買い手や売り手が少ない分、経済指標や政策発言、地政学リスクなどをきっかけに、株価や為替が一方向に動きやすくなるためです。夏枯れ相場は、値動きが鈍くなりやすい季節的なアノマリーである一方、材料次第では相場が急に動く可能性もある点に注意が必要です。

特に、今年の8月は米国の雇用統計や物価指標、企業業績への見方に加え、地政学リスクの動向など、市場が注目する材料は少なくありません。また、8月下旬には、世界の中央銀行関係者が集まるジャクソンホール会合も開かれます。今年は「金融イノベーション: 決済と政策への含意」がテーマであり、金融政策や市場の見方に影響する発言が出るかどうか注目されます。一般投資家にとっては、夏場特有の商いの少なさを意識しつつも、為替や物価、金融政策をめぐる材料が市場にどのように受け止められるのか確認する姿勢が大切になりそうです。

(経済調査部 主席エコノミスト 阿原 健一郎)

時事雑感

6月22日、「マエストロ(名指揮者・巨匠)」と評され、米国の中央銀行FRBの議長を18年5ヶ月(歴代2位)にわたって勤め上げたアラン・グリーンスパン元FRB議長が100歳で生涯を終えた。

グリーンスパン氏はジュリアード音楽院で学びジャズミュージシャンを目指した後、経済学博士号を取得、民間エコノミスト、経済コンサルティング会社経営を経てCEA(大統領経済諮問委員会)委員長を務めた後、1987年にバルカーFRB議長の後任として指名された異色の経歴を持つ(2006年1月に退任)。

就任直後のブラックマンデーを皮切りに、90年代前半のジョブレスリカバリー(雇用なき景気回復)、アジア通貨・LTCM危機(97~98年)、ITバブル崩壊・同時多発テロ(01年)など、数多くの経済危機、市場混乱を乗り切った手腕は高く評価される。オールドエコノミーの国際競争で疲弊した米国経済が、金融やITを牽引車にインフレなき持続的な成長をしていくニューエコノミーへと変貌を遂げることに成功した背景には、ミクロの詳細なデータを分析し、資本市場の力を巻き込みながら金融政策の指揮を執ったグリーンスパン氏の貢献は計り知れない。一方で、長らく金利水準を低位においたことが、米国の住宅バブルとサブプライムローン問題を招いた一因になったとの批判もある。危機が表面化したのは議長の任を降りた後ではあるが、良くも悪くも市場との関係が深かった。

グリーンスパン氏とえば、難解な言葉が市場を惑わせ、エコノミスト泣かせだった。ITバブルが本格化する前の段階で、当時(96年末)の株価の高騰を「根拠なき熱狂(irrational exuberance)」と評したのは有名だ。市場の力を利用しながらも、金融政策と市場との距離感を保つことに長けていた。

5月に就任したウォーシュFRB議長は、議長としての目標とするほどグリーンスパン氏を高く評価していると言われ、近づきすぎた市場との距離感を正したい意向を示している。再び、FRBと市場が緊張感をもった時代が訪れるのかもしれない。

(嵯峰 義清)